rififi

52

cinqüenta e dois

52

目　　次

◇　溺哀　　－２－　吉村　千夜

連載第１回
▼　幻想詩人　　－４－　橋口　さかえ

☆　テーマ競作『もうひとつ』

- ➢　非現実の一部　　―10―　橋口　さかえ
- ➢　もうひとつの選択　　―12―　砂塔　悠希
- ➢　ロマンと泥水　　―14―　吉村　千夜
- ➢　松戸サイエンティスト　　―16―　霜越　邦彦

★　松戸サイエンティスト（最終回）　　―18―　霜越　邦彦

不定期連載第７回
◆　黒竜に騎る男　　―22―　砂塔　悠希

◇　暑い夜だから？　　―30―　白坂　匡

連載第３回
▼　眼鏡越しの空　　―36―　**し も こ し**

■　編集後記　　―48―

溺哀

吉村千夜

研ぎ澄まされた氷のような
夜の
その哀しみに溺れていたいときがある
沈みゆく星の船と
手を繋いで渡る闇の
とろけるようなコールタールの涙
全身に塗って
息も出来ないような
新月の夜

夢魔が運んでくる
どろりとした夢は
せめてあの人の寝息とともに
空気に溶けて
闇夜に散ってはくれまいか

夜は
こんなにも氷のようにとがっているのに

この
腕も
胸も
脚も
首すじも
ちぎれそうなほど痛いのに

あの研がった月の光が
せんない気持ちを
迎えに来てくれるまで
私は哀しみに溺れつづける

毎夜
それを
繰り返す

連載　第一回

幻想詩人

橋口　さかえ

京子はオフィスの窓から隣のビルを眺めた。距離にして三十メートル。視力はそれほどよくないので、ぼんやりと動く人陰が蛍光灯のひかりでぼんやりと見える程度だ。時刻は午後八時。そろそろ寂しくなってきたオフィスはなんとなく寒い。もう一時間ほど同僚三人と残業をしていた。ようやくメドがついて一人はコーヒーを買いにいったし、一人はワープロに最後の見積もりを叩きこんでいる。京子は担当していた資料まとめがやっと終わり、窓の外を眺めて目を休ませていた。

「ああ、なんか肩凝ったわ。帰りマッサージよろかな」

「こんな時間やってくれるとこ、あんの？」

キーボードの音が止まり、大きな欠伸をしながら同僚の美鈴がうめくように言った。

「あるよ。駅前のパチンコ屋さんあるやん。あれの隣のビルにフットマッサージの店できてん。夜十時まで。一緒に行く？もう、気持ちいいよー」

「行く」

缶コーヒーを抱えて戻ってきた高木がドアを開けながら真剣な顔で答えた。美鈴が顔をしかめる。

「気持ちのいいとこやったらどこだって行く。美鈴ちゃん、連れてけ」

「気持ちいいしか聞いてないやろ。あたしらは女の体をリラックスさせに行くの。男のあんたは違うとこでリラックスして来い」

「俺をおいて、女だけでいやらしいとこ行くンやな。わかった。ホストクラブや」

「違う」

京子はブラックコーヒーのプルトップを空けながらため息をついた。

「それは一ヶ月まえに卒業した」

凄い勢いで二人の頭が京子に向く。

「……。冗談や。本当はおかまバーや」

京子は大学を出ると今の会社に就職した。なんてことのない普通の会社だ。文房具の卸しの会社なので忙しいのは決まって年末だ。振り返ってここ八年、ずーっとこのパターンでスケジュール帳のすべてのデザインを覚え

ている。今年もまたスケジュール帳をひたすら眺める時期に差し掛かっている。すでに第一陣を出荷。第二陣がもうすぐ始まる。今年からスケジュール帳の企画の方に廻され、営業に出る機会がぐんと減った。やっぱり仕事は外に出て、お客さんと世間話しをしてこそ仕事だと、訳もなく思う。美鈴もそう言う。夏の営業は外でアイスコーヒーをおごってもらった時点で大抵の商談は決まるという。美鈴は半年前から企画にまわされた。

「ああっ。そこは痛い。痛いってば。でもさ、営業から企画にまわされたのってあたしらだけだよね」

「噂では、やっぱ若い新人のほうがうけがいいという話しですよ」

「黙れ、高木。ゆうとくけど女は三十過ぎてからが花なんだぞ」

美鈴はとなりで微妙な顔をしている高木にそういい放った。それどころではない高木は黙っている。

結局三人揃ってフットマッサージの店に入った。たしかに男がくる雰囲気ではない、やわらかい照明と、しずかなオルゴールの音。今流行りの癒し系で、太陽にあたったことがないような色白の美人が三人を出迎えた。どこからかエッセンスオイルの甘い香りが流れてくる。なるほど美鈴好みの店だ。美鈴は口は悪いが本当はナイーブなたちで本音で何かを言ったことはないと京子は思っている。いや、傷付くのが恐くて、わざとなんでも茶化してしまう。高木はそんな美鈴が好きだということも知っている。高木も同じタイプなのだ。だから、なんでもないように話す美鈴に甘えている。美鈴より二つ下。好きだといえばいいのにと京子はいつも思う。京子は自分が姉御肌だと知っている。いや、周知のことだ。面倒見のいいのを買われて中堅と呼ばれるころから新人は必ず京子のところに廻された。今では京子自身さえそれを当たり前のように感じている。できることなら、美鈴と高木をくっつけたい。将来はお見合いおばさんだなと席に案内されながら考えた。

三人ならんで足のうらに温かいオイルを塗られ、ぐいぐいとマッサージをされているさまはよそから見たら、のどかに見えると思う。京子は時折浮かんでくる涙をこらえながらまな板の上の鯉だか鯛だかさんまだかの気持ちを思い知った。高木もいま同じだろう。美鈴は流石に通い慣れた感じで肩の力を落としているのが横目にもわかる。

慣れたら気持ちがいいから、というのは、何回か来たら

という意味だったらしい。施術をする痩せたおねえさんのどこからこの力がでるのだと、本気で痛いのだ。三十分がやたら長い。
「飯島さん。最近営業成績伸ばしてきたよね。彼女結構がんばるからさ」
「よかったよね。今年彼女だけだもんね。新人で入ってきたの」
「飯島さん、かわいいですよね。俺、タイプだな」
「でも、彼女にはかっこいい彼氏がいる」
美鈴はにやにやしながら高木にいう。
「美鈴、いつみたん」
「先週の日曜日」
「ああ、あんたがお見合いした日やね」
京子はぼそりと呟く。
「ええっ。どんな顔していったんや」
「高木。あんた、わたしに喧嘩売っテンやな。おお、買うぞその喧嘩。かかってこい」
「あとでな。で。美鈴ちゃん。どんなふうにかっこよかったや」
「う～ん。あれはキムタク派って感じ。こう、男の影があるんや。雰囲気があるってこういうのやなって感じ。まあ、高木の中には見つけられへん」
「おお、俺の価値が分からん女やな。美鈴ちゃんはさっさと結婚でもして、俺の魅力に気付け」
「どんな理屈や。あ、そこ痛いです」
京子は足をマッサージしているお姉さんに懇願しながら美鈴の顔を見た。
「なんで断ったン。見合い」
「だからさ」
「断ったンか。美鈴ちゃんと見合いしてくれるだけで貴重な人物なのに。もうそんな人物おらんよ」
「だからさ。飯島さんの彼氏みて思ったンよ。わたしは条件を増やす」
「はぁ」
二人あわせて美鈴に聞き返す。
「だからさ。男のこうアンニュイな雰囲気を持った人を探す。ってこと」
「いままでの条件は？」
高木が恐る恐る聞く。
「背が高くて、高級取りで、両親健在で、もちろん性格よくて。家事も得意で、近所つきあいとかも好くて、顔がいい」

「そんな男は全て出払っております」
「高木に言われたない。ああゆう運命の人がどこかにおるんやと思ったら、断ってた」
　京子は美鈴を見ながら笑ってしまった。マッサージのお姉さんもくすくす笑っていた。目が合う。ああ、この人も気がついているのかと感じる。
「バカやね」
「どっちがよ」
「二人ともや」

　飯島さんはどちらかというとぽっちゃりおっとりしている。声も体にして柔らかく、お客さんの電話にもニコニコとおじぎをしながら話す。その様子は相手にも伝わるのだろう。最近はみつこちゃんと下の名前で呼び出しをかけるお客さんが増えた。これがどういう訳か女の人ばかりだ。小さな文房具卸しの会社である。本屋さんや文房具屋さんと呼ばれる個人商店も多い。
「はい。足りない分はわたしが直接持って行きます。スケジュール帳の動きはどうですか。ああ、見本冊子用意しますね。はい。はい。カレンダーの見本ですか？取り寄せになるのもありますから、早めに持っていきます。明日の昼一ですか。奥さん、食事の時間大丈夫ですか。二時くらいにしましょうか。はい。はい」
　電話の内容を聞きながらさりげなく用意してあげられるものを京子はチェックした。飯島さんはどちらかというと個人商店が多い理由がわかる。と、思う。彼女は受話器をゆっくり下ろすと、メモを持って席を立つ。
「飯島さん。スケジュール帳の見本冊子、ここにあるのも持って行っていいよ」
「京子さん。すみません。あと、カレンダーの見本ですけど」
「高木君がカタログを今朝持っていったから、明日貸してくれって電話しておいたら。あの子、すぐお客さんに貸してしまうから」
「あ。わたしも今のお客さんに二三日貸して欲しいって言われたんです。どうしましょう」
「いいよ。カタログ取り寄せておく。今年こっちにまわってきたカタログ少ないから。カレンダーの名入れも頑張って来てね。粗利すくないけど丸栄カレンダーにいいとこ見せなきゃ」
　京子がそういうと、飯島さんはにっこり笑った。
「京子さん。今日仕事終わってからって空いてます？」

「ん？何。大丈夫だけど。何、お客さんにセクハラされたとか。そんなんやったら仕事中でもいいで。すぐ話しなさい」

京子は飯島さんの顔を見つめて言う。こんな優しい子だから、なにかお客さんにされても何も言えないのじゃないかと思った。飯島さんは困った顔を一瞬してから、にっこり笑った。

「いえ、個人的なことです」

「あ、そう。いいよ。夕飯、一緒にどう？おいしいにくじゃがのある店があるの」

「はい、わたし肉じゃが好きです」

「よかった。じゃ、まず、高木君に電話して、カレンダーのカタログキープして」

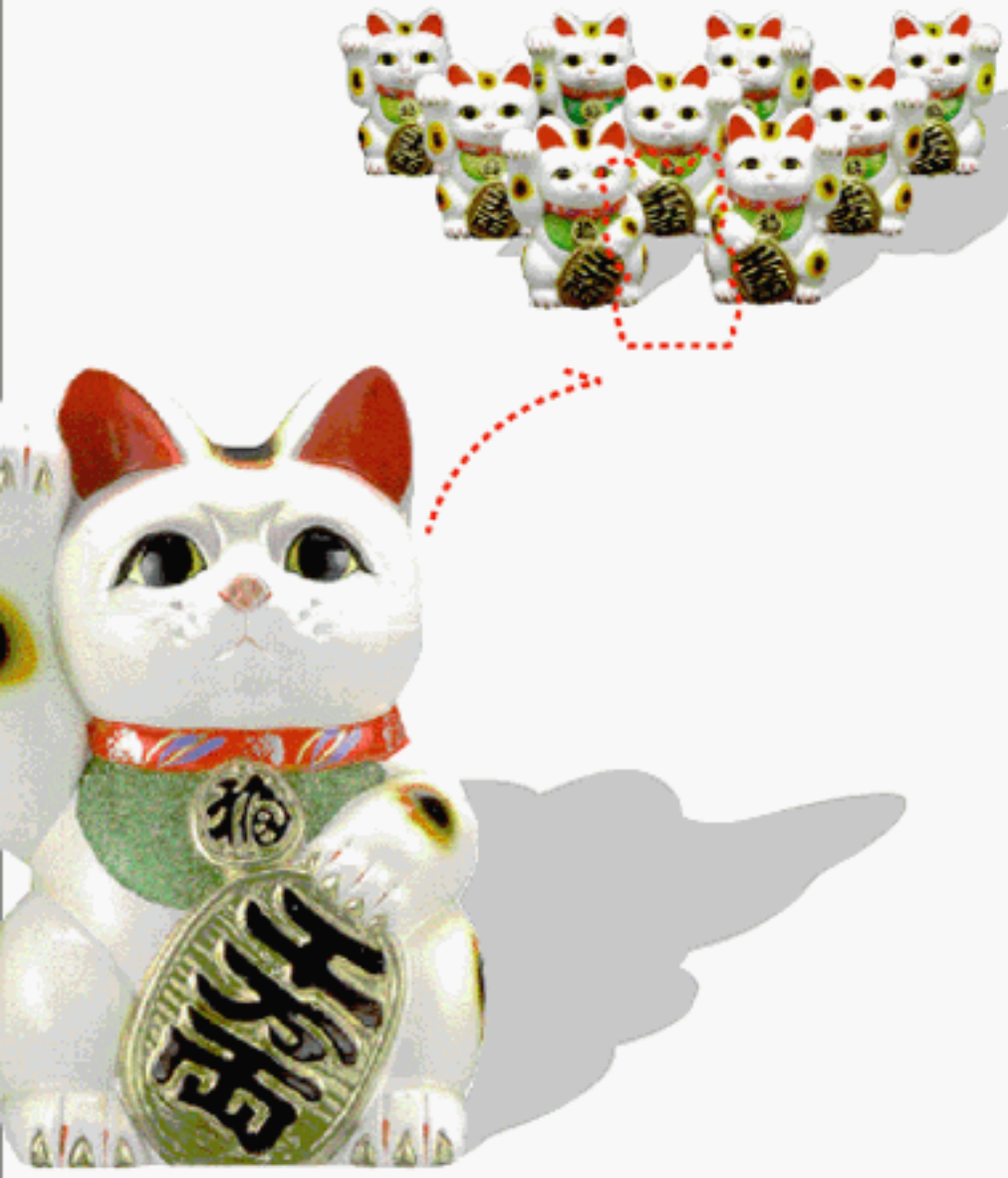
「はい』

飯島はまた静かに受話器を取り上げた。

つづく

テーマ競作

『もうひとつ』



テーマ競作「もうひとつ」

非現実の一部

橋口　さかえ

意を決して病院にいった。

受付が笑顔でどうしましたか。と聞く。どこも体の不調を訴えるような症状はなかった。初診の紙に書くこともなく、何となく体がだるいと書いた。

「お前太った？」

喫茶店でお茶を飲みながら彼が頸を傾げる。

「別に。サイズはどこも変わってないけど。太ったように見えるの？」

「いや。この前、なんとなく重たかったから」

「……。いやね。太ってないわよ」

私は我ながらナイスバディな体を見下ろした。細いウエストの下はでっぱりさえ見えない腹がある。足だって細い。二の腕さえ、手首だって、首だって細い。スリムという言葉は私のためにあると言える。そのかわり胸はない。でもモデル体系は大抵胸ないもの。そう、私は思った。

「たぶん、気のせいだな」

彼はそう言ってコーヒーを飲んだ。

自分の体重が気になったのはそれから一週間たってからだ。会社のエレベーターに私は駆け込んだ。もう私二三人は大丈夫といった余裕さだった。なのに、信じられないことに、耳なれない音がエレベーターに響きわたった。最後に乗ったのは私である。降りるしかないのだけれど、でも、なんで、なるの。エレベーターに誰かが重たい荷物をのせているとしか考えられない。でも、

「私、もしかして、太った？」

帰宅後、まっ先に、おなかが空いたまま、私は体重計に乗った。信じられない結果が待っていた。太ったなんてものじゃない。体重が七十キロを軽く越えていた。針が軽く揺れるのを眺めながら、血の気が引いていくのを感じていた。どこが、太ったのか。ふと、風呂場に目をやるとそこには別段変わらない私が鏡の中でぼんやり立っている。この鏡はブティックなんかによくおいてあるスリムにみせる鏡だろうか。などと、考えてみて。

「どうしよう。どこが太ったのか、分からない」
真剣に体重計の上で悩んで、その日私は夕食を抜いた。

それからの私は、ダイエットの本を買い込んだ。筋肉を落とす。とか、気になるところから痩せるとか、とにかくいろいろ試した。水だって毎日二リットルは飲んだし、低インシュリンとかでそばばかり食べた。
でも、体重は落ちない。それどころか、ちょっと食べるとすぐ針が昨日よりもおそろしい方へと傾いていく。
「そういうのを隠れ肥満でいうのよ」
同僚がケーキをぱくつきながら、私に言った。
「でも、あんたは着痩せってタイプじゃないのにね」
私は、体の線に体重が現れる人がうらやましいと思った。そういう人は必ず解決策があるのだ。痩せたい部分が自分でわかるのだ。メジャーをもって私は体中のサイズを測りまくった。ウエストサイズ五十六ｃｍ。ヒップサイズは八十二ｃｍ、バストサイズ、八十ｃｍ。メジャーは私に痩せているという。

もう、どうしたら、いいのか。わからない。

病院でなんと書いたらいいのか分からないままぼんやりしていた。

もうひとつだけ、ダイエットを試してみようか。
もうひとつだけ、体重計を買ってみようか。そうだ、体脂肪の測れるのを買ってみたらどうだろう。体脂肪のせいかもしれない。それに、内科の先生じゃわからないかもしれない。
「どうしました？」
受付が微笑んでいる。
「あ。いえ。今日は帰ります」
私はボールペンを置くと受付の止める声を無視して病院を出た。もう一つ体重計を買うために。

テーマ競作『もうひとつ』

もうひとつの選択

砂塔悠希

闇の中で声がしている。低い、腹の底に轟くような低い声。ギネアス・アルビレオは、その声に誘われるようにそこに足を踏み入れた。北海に面したその洞穴は、わずかばかりの海岸から垂直に切りたった崖の、半ばほどにぽっかりと口を開けていた。

恫喝するかのように低い声が再び轟く。

――――受け・入れよ――――

その声はそんなふうに聞こえた。

（……何を？）

頭にもちあがった疑問は言葉になることはなく、三度（みたび）轟いてきた声にかき消された。

――我を・受け・入れる・のだ――

ごうという風が巻き起こり、ギネアスの体が宙に浮く。背後から熱を伴わない爆風を受けたかのようにギネアスは、洞穴の奥深くへと吹き飛ばされた。

そこには伝説があった。この北の果ての地に、強大な力を持つ古竜（エンシェントドラゴン）が棲んでいると。古（いにし）えの竜は人語を解し、魔術を行使すると。竜は力を欲する者にその力を貸し、その代償として心を喰らうという。では心を喰らわれた者はどうなるのか。伝説ではそこまで語られてはいない。

この西の果てにある小さな島国の、北の果てに伝わるお伽話。ま黒き竜が棲まうその地に伝わる……

（……力さえあれば……私に力さえあったなら……）

ギネアスは冷たい石の感触に薄く目を開けた。風を受けた際の衝撃で気を失っていたらしい。ゆっくりと体を起こしながら周りを見まわす。暗い。熱で溶けたような光沢のある岩壁に囲まれている。大人2・3人が優に立って歩けるほどの広さだ。前後に光。後方の光は小さく弱い。前方の光は上のほうから差し込んでいるようだ。

光に導かれるようにギネアスは前方へと足を進めた。あの奥に伝説の竜がいる。古の竜が。それは、力を与えてくれる。力を与うに相応しい者に。

数十ヤードを歩き、ついに光の中に入ってギネアスは目を瞬かせた。光に慣れるまでの間、目を細めて周囲を

観察する。足元は緩やかに下ってすり鉢状になっている。楕円形のすり鉢は差し渡し百ヤードほどか、その中央に巨大な黒い影がある。と、その黒い塊が不意に動いた。

ガツンと何かで頭を殴られたような衝撃によろよろと後退する。ガンッと再び額を殴られ目の奥に星が走る。

（誰かいるのか？私のほかに誰か）

ギネアスは片膝を付きながら薄く目を開けて、周囲を見回した。

見える範囲には誰もいない。ただ、赤い光が差し込んでいるだけ。

（赤？）

――――か？――――

声が聞こえたような気がして、目を閉じて耳を澄ませた。だが、もう声は聞こえてこない。

（空耳、か……）

嘆息して前方に進もうと顔を上げたそこに、ギネアスを見つめる一対の目があった。

それを美しいと言わずして何と言おう。磨き上げられた黒曜石のように、つやつやとした光沢を持つ黒い鱗に覆われた体に薄い皮膜のような翼を行儀よく折り畳み、長い首をもてあますことなく優雅に折ってルビーのような真っ赤な瞳をまっすぐにこちらに向けてきている。その瞳には知性があり、達観したもののような鷹揚なしぐさでこちらを見つめている。

――――……か？――――

それが、眼前のこの美しい竜の発した言葉であると気づくのにそう時間はかからなかった。

――――汝、力を求むか？――――

竜の問いにギネアスは力強く頷いた。だからこそここまで来たのだ。国を出、海を越えてまで。

――――何故？――――

（力を求めるものに力を貸し与えると聞いたからだ。）

ギネアスがそう考え、返事を口に上らせる前に竜は再び問うてきた。

――――汝の求むる力とは？

（何者にも負けぬ力。力さえあれば友もあの方も失うことはなかった。私に力さえあれば……）

――我が力、守るものにあらず。汝、力を求むか？――

はっとしてギネアスは竜の目を見つめた。試されているのだ。力を得るということの意味を。

しばし瞑目してギネアスはその答えを口に上らせた。

テーマ競作『もうひとつ』

ロマンと泥水

吉村千夜

ねっとりとした夜の重さの中で、私は夢を見た。

私は誰かと食事をしていた。楽しげに喋りながら、確かに食事をしているのに、ふとテーブルの上に目を移すと、そこにあるのはたくさんの紙だった。数え切れない書類や、ボールペンや消しゴムやペン差しが、乱雑でありながらとても美しい配置でテーブルの上いっぱいに広がっていた。

そんな馬鹿な、と思うのだが、私たちはナイフとフォークを持って食事を続けている。口の中で噛み砕かれているのは確かに料理なのに・・・それも普段口にすることのないような美味しさのものばかりなのに、やっぱりテーブルの上は書類と文房具で溢れている。

私は細長いグラスでシャンペンを飲み、下の上ではじける感触を楽しむ。でも見えるのは、大昔に父の机の上に乗っていたような、古風な羽ペンを模した物がペン差しにささってその身を硬くしているところだけなのだ。

彼は、書類の飛ぶ空間を隔てて私に絶えず微笑みかけ、甘く囁き、愛しそうに私を見つめている。いつか、どこかで、この瞳に私は出会ったことがあっただろうか・・・

溺れそうな甘い空気の中で、私は目覚めの時を拒もうとする。どうかもう少し、もう少しだけこの人と・・・

ぐったりとした目覚め。身体が重かった。

その日の私は何かぼんやりとした膜で覆われているような気持ちだった。脳にオブラートがかかって、何かを見ても見ている気がしない。仕事を機械的にこなしつつ、甘ったるいだるさの中で、雲を踏んでいるような感触で歩いていた。

突然、私の足は雲を突き破って地上に落ちた。

目の前に彼がいた。夢の中の彼、書類の洪水の中で甘露の食事を共にしたあの人。そうだ、間違いない、ならばこれは夢の続きだと言うのだろうか？　いや・・・

彼は笑って、部長に会いに来たのだと私に伝えた。その会見の間じゅう、私はひどく居心地の悪い気持ちで彼が出てくるのを待った。十五分の永遠の後、彼は帰った。帰り際、私に一枚の名刺を残して。隅に、携帯の番号を

書き加えて。

そして私たちは現実のテーブルを幾度も囲んだ。彼は私をどこかで視たことがある、と言った。それは夢の中だったのかな。そう、私たちは多分眠りの中で一緒にいた。あの夢を共有した同胞なのだ。彼の手、瞳、深く甘い声、すべてがあの時のままで、私はそれを愛さずにはいられなかった。何もかもが運命なのだと、私は深い満足を覚えずにはいられなかった。

ところが

それから二ヶ月ほど経ったろうか。私はまた、もうひとつ別の夢を見てしまったのである。

私はまた食事をしていた。彼が私の前で笑っている。私の胸は彼の笑顔を見ただけでかき乱された。どんなにか、その甘い微笑みを愛しただろう！　だけど・・・

何かざわざわとした冷たいものが、私の胸にさあーっと流れ込んできた。はっとしてテーブルの上を見た。そこには蜘蛛、蛙、蛇、ムカデ、あらゆるおぞましいかたちの生き物が這い回り、増え続けている。

私は悲鳴を上げて飛びのいた。助けを乞うように彼を見ると、彼の目の前に蛇を裸体にまとった、人間とも何ともつかぬ、けれどそれは確かに女なのだ、女の身体が横たわり、その蛇が彼の首に巻き付いていく・・・そしてゆっくりと私を見る。変わらない甘い微笑みを浮かべた顔が、つるりとした白さをもって私にまで巻きついてくる。私はもがき、その手を必死になってほどいた。

その日以来、私はもう彼の顔を見ることは出来なくなってしまった。

私はすっかり恥じ入った。何てことだろう、いい年をして夢に告げられるがままに気持ちが翻弄されるとは。それでも、あのぬめりとした白い顔を、甘く美しいものだと思っていたとは自分でも信じられないのであった。女の心とは、こんなものであるのだろうか・・・それは・・・自分でも限りなく心もとないのである。

そして全ての傷が癒える頃・・・また、深い黒々とした夜の中で、ひとつの夢が私を訪れる・・・

テーマ競作『もうひとつ』

松戸サイエンティスト

霜越邦彦

4　も一つたたくと・・・

松戸市民会館二階の八畳間にある研究所の襖を、いつものように、みさをさんが開けると、松戸博士が何やら手術をしている様子が目に飛び込んできた。部屋の真中、畳の上に手術台があり、人が横たわっていた。ボロボロの柔道着を着た男性で、眠っているようだった（眠らされている？）。博士は手術台の脇で手術着を着てメスやら何やら、道具をとっかえひっかえしながらせわしなく動いていた。みさをさんは一瞬あっけにとられていたが、すぐに我にかえった。びっくりした声で、こんなところで何で手術しているのか、医者でもない博士がなんで手術してるのか尋ねた。博士は手術が終わると、ふーっと息をつき、徐にタバコを吸い始めてから答えた。

「これは手術ではないのじゃ」と平然とした様子で答えた。「これは『改造』なのじゃ」

「え、…改造って、ロボットなんですか」

「んにゃ、ながれ山　三四郎さんじゃ」

「はっ？…、て、…誰ですか」

「だからこの人じゃ」と手術台の人を指す。

「いや、そういう意味じゃなくって…えっ、それっ、人なんですか！」みさをさんはメマイがしてきた。みさをさんの頭の中を、改造人間とかサイボーグとかいう言葉が団体になってイモムシのように這いずり回った。みさをさんは頭を抱え、酷い疲労を感じながら訊いた。「そうじゃなくて、何者なんですか」

「異空間や時空間への入口を作れる者じゃ」

「いや、どこの誰なのかということで…え、うそ、そんなことができる人なんですか、すごーい！」

「そうなのじゃ。…改造してそうなった」

みさをさんはそれを聞いてブッと噴出した。今度は、やっぱり、という文字が頭の中を這いずり回った。

「で、博士、本人の許諾は得てるんでしょうね」

それを聞き、博士は暫く固まってから、徐に「ウニャー」と言い、まるで猫のように顔を洗い始めた。

「博士、猫になって誤魔化してもだめです！」「じゃ、ワンワン」「犬もだめです！」「ブーブー」「豚も！」「ヒヒーン」「馬も！」「パオーン」「象も！　鼠も牛も虎も兎も羊も猿も鶏も！」博士は口を尖らせ「ちぇっ」「『ち

ぇ』じゃありません！」博士はまた何かしようとしたが、先にみさをさんが釘を刺した。「アナコンダも！」「う、…何でわかったんじゃ」うろたえたが、すぐに博士は冷静さを取り戻し、「…まぁ、そんなこと、どうでも良いのじゃ」

「『どうでも』って…」

「さ、ながれ山、アナザーワールドを開くのじゃ！」

博士がそう言うと、ながれ山　三四郎は手術台からムクリと起き上がり、何も無い空間に向かってパンチした。すると、ドコーン！　という音と共に、そこに直径１メートルくらいのパラレルワールドへの入口が開いたのだった。みさをさんの口もパックリ開く。入口の向こうには別世界の松戸博士がいた。同じ顔をしている。どういう意味があるのかは不明だが、ながれ山　三四郎はその博士の首根っこをムンズと掴み、こちらの世界に連れてきた。「おわっ、何々じゃ、ピロピロピロ…」。それだけでは終わらず、彼は、ドゴゴーン、ドゴゴーン…と音をたて、また口でもそう言いながら次々とアナザーワールドを開き、次々とそれらの世界の博士を連れてきたのであった。「何々じゃ、キョロキョロキョロ…」「何々じゃ、ウパパパパパ…」「何々じゃ、ニョロニョロニョロ…」…以下略。みさをさんは「ムンクの叫び」顔になりながら悲鳴をあげる。

「いやぁぁぁ、やっぱりこのパターンなのねぇぇぇ」

ながれ山　三四郎は最後に、「も一つおまけに、ドゴゴーン！」と言って最後に作った入口に自ら入り、走り去ってしまった。

みさをさんは腰を抜かして座っていたが、入口が閉じ始まったのを見て慌てた。リミットがあるらしい。立ち上がり懐からゴルフクラブを取りだすと、博士を一人ずつ打って元の世界へと戻した。しかし、一人だけ、渡哲也バリの素敵な博士がいるのに気付き、その人は残すことにして、別の博士をクラブで打って別世界に送った。

「うおっ、わしはこの世界の博士なの…」スッコーン！

「まぁ嬉しい。こんな素敵なおじ様が残ってくれて！今号は最終回だし、これでハッピーエンドだわ！」

と喜んだが、残った博士はとんでもないことを言った。

「残念だが、『もうひとつ』だけに、今号はもう一話あるのだ。さ、５話の最終回へ行ってみよう」

「うっそ」ムンクの叫び的「いやぁぁぁぁぁん！」

最終回、４ページスペシャル
注　今号「テーマ競作」の４話を先にお読みください。

松戸サイエンティスト

霜越邦彦

５　さよなら、さよなら、さよなら

松戸博士の陰謀で、遠い星に送られてしまった、みさをさんの夫、政和さん（４９号の一話目参照）。彼から松戸研究所にＦＡＸが送られてきた。それには近々地球に到着するとのことが書いてあった。政和さんは地球に向かっているところらしい。みさをさんはそのＦＡＸを抱きしめた。

「いやーん、やっと帰ってくるわ！」

それというのも、渡哲也バリの素敵なおじ様になった松戸博士のおかげであった。帰還用の宇宙船を送ってくれたのだ。一話目登場の瞬間移動機は一方通行で、これでは戻ってこれないのである。今度の博士はまともな人で本当によかったと、みさをさんは思った。

「博士、本当にありがとうございます！」みさをさんは深々と頭を下げる。そして面を上げたときだった。みさをさんには、博士が何やら準備を始めているように見えた。「博士、どうかしたんですか」

「うむ。過去の政治家や有名人を立体スキャナでとり、研究材料として保存しておこうと思っているところだ」

そう言い、三話目で登場した釣竿型タイムマシンを振って調子を調べていた。博士の背後には「立体スキャナ」とおぼしきマシンがある。それは人ひとりが入れる大きさの立方体で、上部に入口らしき穴が開いていた。

みさをさんは、過去の政治家を研究目的で保存する、なんて言う博士が益々気に入った。今までの博士とはエライ違いである。

博士は「ふんっ」と竿を振って過去の有名人を一本釣りした。まず釣れたのは田中角栄であった。びっくり顔で辺りをキョロキョロしている角栄を博士は抱え上げて、立体スキャナに放り込んだ。マシンはブーンという音をたて、一分後、入れた口からスッポンと角栄を吐き出した。博士は角栄の襟に釣鉤をつけると、また「フン」と竿を振って彼をもとの時代へと戻した。博士はその後も過去の人物を釣り上げてはスキャンし、もとの時代に戻す、という作業を繰り返した。田中真紀子、ジャイアント馬場、小泉純一郎、栗本慎一郎、長島茂雄などなど、である。

目的の人物を一通り釣り上げると、八畳間の真中にちゃぶ台を出し、みさをさんの入れたお茶を二人してすすり始めた。お茶を飲み干して「さて」と腰をあげたときだった。何やら上空からキーンという得体の知れない音が聞こえてきた。

「は、博士？　な、なんでしょう、いったい」

「うーむ、わからん。…しかし、危険のような気が…」

そのときだった。突如、ズッドーン！　と屋根と天井を突き破ってロケットが落ちてきたのであった。ロケットは立体スキャナの付近に落ち、シューッという音をたてている。博士は振動でヨロメキ、その拍子に立体スキャナの中に落ちそうになった。…が、なんとか両手で入口脇を掴み、体を支えることができたので落ちずに済んだ。…しかし、その後である。博士は固まって、そこから動こうとはしなかった。

「博士、どうかしたんですか」

「こ、腰が、…ギックリ…腰に…」

渡哲也もギックリ腰では格好悪い。

みさをさんは驚いたが、次の瞬間、ロケットのドアが開いてもっと驚いた。中から夫の政和さんが出てきたのである。

「きゃーっ、あなたー、お帰りなさーい」

「おお！　みーちゃん、元気ぃ？」と政和さん。

「お、おい、それより、こ、腰が」と博士。

「元気よー」とみさをさん。

「だ、だから、こ、腰」と博士。

がっし、と抱擁する二人であった。

「わ、わかったから、こ、腰…」

抱擁していると、急に立体スキャナがボ、ボボン、ボボボン、と音をたて始めた。驚いてそちらの方を見てみる。どうも立体スキャナが今の衝撃で故障したらしい。しばらくボボン、ボボンといっていたかと思うと、急に、上部の口から博士の目の前を通過して奇妙な生物が飛び出してきたのだった。…スッポン！　と。

「な、何なの。何なの博士！」

「う…、わからんが、どうも…、子泣き爺のようだな」

「え、妖怪？　どうして、そんなものが出てくるの？」

「うーむ、どうやら、故障してスキャナで取った情報が逆流し、人物を再生してしまっているようだ。おまけに再生する際に情報が混乱して、妖怪のような姿になってしまったと思われる。…おそらく…、これ、もとデータは、…田中角栄…」

と、博士は説明する。…ギックリ腰の状態で…。また、そう説明している間も次々と妖怪が飛び出してきた。
「は、博士、あれは…」
「…砂かけババァでは」
「いやいや、もとは」
「田中真紀子、…か？」
「じゃ、あの『ぬりカベ』は」「ジャイアント馬場？」
「『一反木綿』は」「小泉純一郎？」「『河童』は」「絶対、栗本慎一郎」「『雪男』は？」「毛むくじゃらだけに、『長島茂雄』か？」
などと言っている間も妖怪は出続ける。
「博士、ギックリ腰はわかりますけど、そこにいたら危険ですよ。こちらまで歩いて来れませんか」
「うーむ、ギックリ腰の上に、腰が抜けたのだ」
「……」とみさをさん。
「……」と政和さん。
手の施しようが無い…。
部屋が妖怪でいっぱいになると、とうとう品切れになったのか妖怪は出てこなくなった。
落ちついた頃、博士はそろそろと、みさをさんたちの方へと移動しかけたが、実はそのタイミングが悪かった。博士のそばで、ドゴゴーン！　という音がしたかと思うと、そこに別空間が開き、そこから、ながれ山　三四郎が飛び出てきたのだった。その進路方向に博士がおり、ながれ山　三四郎はみごと博士に追突したのだった。博士はポーンと宙を飛び、立体スキャナの穴にスッポリと落ちた。
「きゃーっ、博士！」
立体スキャナはゴロゴロと音をたてる。
部屋にいた妖怪たちは行く場もなく、うろうろとしていたが、ながれ山　三四郎の作った口を見ると、そろってそこへ入って行き消えうせてしまった。…ながれ山　三四郎は時空間の入口も開くことができる(四話目参照)。…ひょっとすると、日本の過去へ行ったのかもしれない。…え、と、すると、これが妖怪伝説の始まりか（ｂｙ作者）…？
博士の方は、というと、立体スキャナからスッポンと吐き出され、畳の上にゴロンと転がった。姿はマシンの不具合のせいか…？　何故かもともとの「爺」の姿になってしまった。…せっかく素敵なおじ様になったのに、元通りである。
「いやーん、最後はこんなオチなのね」とみさを。

「まぁ」と政和。「俺も帰って来れたし、いつもの博士に戻ったし、『元通りになった』ってことで、いいんじゃない」
「うーん、…まぁ、いっか」
「じゃあ、二度目の再会を祝して、パーティしよう」
「え、『二度目』って、なに？」
「ほら、結婚前の再会が一度目の再会じゃないか。…え、憶えてないの？　子供の頃、御祭の日に別れたのが一度目の『別れ』でしょ」
「…あ」みさをさんは考えた。子供の頃、マーくんと呼んでいた少年（51号の三話目参照）。夫の名前は、政和…まさかず。ま…さかず。マーくん。「あの『マーくん』って、あなたっだの？」
「そうだよ。…あれ、言わなかったっけ」
あのマーくんが自分の夫だってことに気付いてなかったなんて、間抜けな、みさをである。自己嫌悪に陥ってると、政和の胸ポケットから、ひょっこりと顔を出す小人が見えた。
「わたしのこと忘れないでよね」と小人が言う。
「…う、そういえば…、すっかり…」その小人は、一話目で間違って縮小して送ってしまった、みさをさんのコピーであった。「これって、三角関係なのかしら。…自分なのに」
「まぁ、みんなで仲良くやっていこうよ」と政和。
そのうしろ、図太い声で、
「わたしもか？」と、ながれ山　三四郎が言った。
「え、嘘でしょう」彼が喋るとは思っていなかったので驚いた。「だいたい、あなた、どこの何者なの、わかんないのよー」
それを聞くと、ながれ山　三四郎は急に笑い出し、「それが『ながれ山　三四郎』」そう言って、ドゴゴーン！　また別の空間への入口を作り、その中へと消えて行ったのであった。
「『めでたし、めでたし』じゃの」と博士。
「何が！　…え、うそ、ほんとにこれで終わりなの」
「んじゃ、さらばじゃ」

松戸サイエンティスト、おわり！

不定期連載第7回

黒竜に騎る男

砂塔　悠希

「用意は、できたか？」

囁きを背後に受け、ガシムは目を閉じた。王に与えられた自室のある北の塔から王の居室のある本丸へと向かう回廊の半ばほど、捻くれた樹の立っている場所だ。

ダークと言えどエルフに変わりはない、森に繋がるものからは離れられない、か。一族を捨てたとも憎んでいるとも言うが、本能は欺けんわけだ。ガシムは気取られない程度に薄く口端を歪ませた。

「……例のもの、か…？」

云わずもがなの問いに、殺した気配に殺気が混ざる。

――――　気の短いこと　――――。

前回までのあらすじ

スカルツ王国の第3皇子クリストファー（クリス）は、エルフ王グレイバラロレフを祖父に持つ1／4（クォーター）エルフ。

この夏の初め、スカルツ北部地域のハイランドの北部にあるドワーフ族最大の城キルサーン城が、ハイランドの北に浮かぶ島魔族の国オーガーの突然の侵攻により陥落し、先のエルブン戦争を治めた聖剣のひとつであるダーク・ソードが奪取された。デュアル・リゲイリア―覇王の宝称と呼ばれる4つの神器のうちの一つである。

事態を重視したスカルツ国王アーサーは、第2皇子アレックスにオーガーの動向を探らせるために、領国各地への巡回を命じ、まだ見習い騎士だったクリスにその1／4エルフの能力を以て、デュアル・ソードを水竜から預かりおくよう命じたのだった。

クリスはデュアル・ソードを水竜から預かる過程で、奇しくもオーガーの戦士と出会い、オーガーの真の目的が覇王の宝称を利して世界を支配することであることを知った。オーガーが次に狙うデュアル・リゲイリアを守るための皇太子スチュアートの出陣を前にして、アーサーはクリスにキルサーンの城で落ち延びているはずの、神官チャ・ザとドワーフ族の皇子シャナ救出を命じた。

クリスは友人のルディを伴い、キルサーンに潜入するために、ドワーフの街道の場所を尋ねるべく、幼いころの友人であるエルフ族のサラを訪ねるが、エルフ族の里アールブヘイムで起きた変事のため、サラがバレンツの岬にある黄金樹のもとへと旅立った事を知った。

サラを追いかけようとしたクリスにスィロカムラスという若いエルフが同行を申し出て、一行はバレンツの岬へと向かった。

バレンツの岬でサラに追いついた一行だったが、黄金樹はサラに答えることなく、樹が弱っていることを知ったクリスがその場で互りを行ない、精霊たちの力を借りてアールブヘイムに起きた変事の原因を知ったのだが…

ガシムはゆっくりと振り向くと、長身のダークエルフを上目遣いに見上げた。すでにヴェルゼヘルサムはその端正な顔に僅かの表情すら浮かべず、ガシムを見つめている。

「渡す前に一つ、聞いてもよろしいかの？」

冷たい氷青（アイスブルー）の瞳は、こそりとも動かない。それを肯定と受け取ってガシムは先を続けた。

「これを如何（いか）にして使う？」

ミスリル銀の武器はダークエルフらしい選択だとは思うが、毒まで使って亡き者にしようというのか？　あの、少年を？

「奴は、ハーフエルフだ」

彫像のように動きのない唇が質問の意味を解さぬかのように告げた。褐色の肌は変化をつかみづらい。ガシムは内心嘆息してダークエルフの言葉に自らの意図を重ねた。

「左様、ハーフエルフ。人間よりもひ弱でエルフほど知に長けるわけではない。何とも半端な存在。それをなぜそこまで気にされるのかと聞いておる」

「……血……」

ボソリとダークエルフは言いかけ、そのまま口をつぐんだ。

「血？」

グレイバラロレフの血統を言うのか？　その血に何か隠されていることが？　エルフ族の血には何か秘密が？　それとも……。考えを改めなければならぬのかも知れん。このダークエルフをここまで慎重にさせるものが何かを、まずは知らねば……。

せわしなく瞳を動かしながら考え込むガシムに、冷たい氷青（アイスブルー）の瞳がすうっと細くなる。

「出立する。用意したものを渡せ」

話はここまでとばかり眼光を鋭くしてヴェルゼヘルサムが睨む。ガシムはふぅと微笑うと踵を返して言った。

「付いてくるがよい」

塔へと戻りながら、ガシムは『血』についてもう一度考えを巡らせた。血、エルフ族の血、血統、ハーフエルフ……ハーフ。人とエルフの間の子。グレイバラロレフ王の孫。アーサー王の子。アーサー王の…？　ジョージ王の曾孫！　――――なるほど。スカルツの建国王ジョージ。アンドリュー3世の異母弟。ガシムはにやりとして後を付いてくるヴェル

ゼヘルサムを盗み見た。
『例のもの』と『情報』とを駆け引きの道具に使ったとき、ヴェルゼヘルサムはどう出るか。ガシムは長い螺旋階段を上りながら『情報』を引き出す方策を考え始めた。

ピクリ、と目蓋を震わせて、大きくひとつ吐息を吐くと、クリスはゆっくりと目を開いた。夕陽が黄金樹の幹を黄金に輝かせている。
「クリス…」
サラの呟きにルディがばりと振り返る。
目を瞬かせて、ゆっくりと首を巡らす。と、真夏の空のような青の瞳が不安げに揺れているのが目に入った。息を詰め、もの問いたげに少し唇を動かしたが、言葉にはならなかった。
「……森を出て、野営の準備を…」
かすれた声で告げる。思っていたより消耗が激しい。幹を支えにして何とか立ち上がると、戸惑ったような表情でルディが頷いた。無言で自分の肩にクリスの腕を回す。ルディに肩を借りて森を離れるクリスに、二人のエルフも黙ったままつき従った。

身を隠せるような崖をようやく探し出した頃には、すでに陽は遥か水平線の向こうに消え、霧があたりを白い闇に染めはじめていた。
鉛のように重い身体をできる限り乾いた土の上に横たえる。
「これからどうすんだ？」
どさ、とルディが横に腰を下ろしながら尋く。
「……長老に報告しなくちゃならないだろうな。敵の動きも気になるから、できれば急ぎたいところだけど……」
欠伸をのみこみ先を続けようとして身体を起こし、サラを見る。目があって、それまで真剣な表情をしていたサラがキョトンと見返す。クリスはその目を見つめながら言った。
「俺達はできれば街道を使ってキルサーンに向かいたい。できうる限り早く」
「キルサーンへ？」
ここまでの経緯を知らないサラは、さらにキョトンとなって聞き返してきた。
「サンサーラは街道の入口を知っているのかい？」
事情を知るスィロカムラスが助け舟を出そうと、

サラに問いかける。
「ええ、でも…あたしが知っているのはアールブヘイムのところ一箇所だけだけれど……」
戸惑ったように小首を傾げながらサラが呟いた。
「やっぱり戻らなくちゃダメかぁ」
クリスは頭の後ろで手を組むとそのまま後ろへ寝転がった。
「戻って、街道を使って、キルサーン……三日半、ってところか。結構痛いな」
ルディが親指の爪を噛みながら呟く。
「……最短で、だよ。問題は果たして長老がこのまま俺達を放してくれるかってことの方だ。彼らにとっちゃドワーフの村がどうなろうと関係がないからなぁ」
ぼんやりと思ったまま口にしてみる。果して長老は、自分の話を信じるのだろうか？……信じざるを得ないか。〝互る者〟がそういうものだということは重々承知しているだろうし。
「そんなもんかぁ？」
そういうものだよ。と思いながらルディを見やる。と、サラの隣、クリスと向かいあう位置に座っていたスィロカムラスが尋いてきた。
「なぜ、そう思われるのです？　……その、長老が、貴方を離されないと？」
クリスは、しばらく考えてから半身を起こしてスィロカムラスを見ると、言った。
「……矢面に立つ気はあるかい？」
「は？」
「その覚悟があるのなら理由を話すよ。……あ、でも……」
流れを変えることはできない。けれど、打ちこまれた楔を抜こうとすることは流れを変えることになるのか？　自然のままにしておくべきなのか？　例えそれが、誰かを傷つけることとなったとしても？
「覚悟…？」
ごくりと唾を飲んでスィロカムラスが聞き返す。その真剣な表情にクリスは、少し躊躇した。
「いや、今は……。とにかく休もう。明日の行程でできるだけアールブヘイムに近づきたい」
話を振っておきながら逃げるようで悪いとは思ったが、考える時間が欲しかった。
「いえ、しかし…」

「休ませてやれよ。疲れてんだろうからよ」
食い下がろうとするスィロカムラスに、ルディが制止をかけた。話の流れでそう急ぐことではないと思ったのだうう。有無を言わせない口調で、スィロカムラスを睨むように下から見上げる。スィロカムラスも黙って座り直した。そう、今は休むべきだ。時間はまだある。ぼんやりとした月が白い闇に浸食されてゆくのを見ながら、クリスは意識を白い闇に委ねていった。

出立は夜明けと同時だった。立ち込める霧は晴れることなく、遠くのボンヤリと丸い陰となった太陽に向かい視界をさえぎる霧の中を、一行はただ黙々とアールブヘイムを目指した。
時折、もの問いたげに向けられるスィロカムラスの視線を感じながら、クリスは未だ迷っていた。
アールブヘイムに入り、互りの結果を長老に話せばまず間違いなく、彼らの話し合いが終わるまでその場に幽閉されるだろう。その結果彼らが何を選び取るか、それによって自分たちの処遇も変わるだろうがそれは問題ではない。どれほど時間をかけようとおそらく同じ結論に行き着く。だが、今はその時間が大切なのだ。気の長い彼らがそこに行き着くまでチャ・ザたちの命がもつのだろうか？　ドワーフの、鉄の王国最後の王子が果たして逃げおおせられるのだろうか？
……時間は、ない。彼らの結論を待つ時間は、ない。今は一刻も早くキルサーンへ向かうべきだ。しかし、報告をせずにキルサーンは向かうわけにはいかない。しかし、報告をすれば……。
思考が堂々巡りをしているのを感じて、クリスは立ち止まり息を吐いた。
「どした？」
先導が止まれば行軍も止まる。後ろにいたルディが横に並び、不審気に声を掛けてきた。一瞬通り過ぎかけた二人のエルフも立ち止まって振り返る。
「いや…」
心地悪さに身じろぎする。
「先、急ぐんだろ？」
「ああ……」
クリスの虚ろな返事にルディは眉を寄せて聞いてきた。

「まさか――――道に迷った、とか言わないよな」
本気でそれを心配しているのやらどうやら、きょときょとと周りを見回す。
「いや、それはない。ただ…」
言いかけて思いとどまる。祖父の言葉が耳に響く。
――――迷いを見せるな、と。〝互る者〟とは導き手なのだから、導くものの迷いは不安となる。不安は不信を生み、不信は秩序を崩壊させる。例え迷っても、その迷いを見せてはならない。
「ただ？」
ますます不審気にルディが尋いてくる。
「……そろそろ谷だ、と思ってね」
「？」
だからなんだ？とでも言うように眉を寄せるルディに、小さくため息をついてクリスは告げた。
「だから……その……」
二人のエルフも何のことかと首を傾げる。
「少し、休まないか？」
「……お、おう」
少し肩をコケさせて応えるルディに、微苦笑してクリスは休める場所を探しはじめた。

とにかく、落ちついて考えることが先決だ。悪い予測だけではなく、何か別の策を……
幸い広い岩棚がほどなく見つかった。濃い霧は晴れることなく体を濡らし、秋の冷気が体力を削いでいく。
深い息を吐いて腰を下ろしたクリスに、岩棚の右端に立ったスィロカムラスが、不安気に声をかけた。
「どうしますか？このままここで霧が晴れるのを待ったほうが…？」
「……」
「ねぇ、クリス。このまま行っても迷いの森に着くのは夜になるわ。スィムスのいうように霧が晴れるのを待って……」
黙ったままじっと行く手を見つめるクリスに、サラがスィロカムラスを後おしするように言う。確かにそうかもしれない。けれど…
「里のそばで夜営すればいんじゃないか？　森のそばに小川があったろ？　あれくらい離れてりゃ、火ぃおこしても大丈夫だろ？」
なおも黙ったままでいるクリスに、沈黙を否定と受けとったのか、ルディがクリスの左側に回り込ん

で言ってきた。
「……」
結論を先のばしにしても問題はないのか？　あまり急いで結論を出すべきではないのか？　今ここで自分がそれを語ったとしたら、彼らはどう出るのか？　取り返しのつかないことになりはしないのか…
迷いが表情に出ていたのか、決定を促すようにルディが言ってきた。
「余計ごとばっかくよくよ考えるより、とりあえず前に進んどけばいいじゃないか。あとはその場になりゃ何とかなるって」
「そういうものかしら？」
サラが首を傾げた。
「そんなもんだよ。少なくとも俺はずっとそうだったけど？」
何を考えているのか気楽な調子で、頭の後ろに手を回しながら言う。そりゃ、お前はそうだろうさ。考えるのはいつも俺だったんだから…。上目遣いにルディを見やる、と、ルディは片目を瞑って、
「なるようにしかならねんだからさ」
と、言いながら乾し肉の袋を放ってよこす。
「……ま、それもそだな」
どちらにともなく答えると、クリスは乾し肉を一つ口の中に放り込んだ。

「盲点とは…このことだな」
エバンスは苦々しげに呟くと玉座の足元にぽっかりと開いた穴を見つめた。玉座の下が入口であることは容易に知れた。しかし、細工好きというか、カラクリ好きというのか、その入口がどうあっても開かない。その複雑な手順を見つけ出すのに丸1日を要した。
全くもって愚かだとしか言いようがない。脱出路とは王族を脱出させるためのものに他ならない。ならば、玉座の周りにそれがあるとなぜ気づかないその上、自らの身でそれに蓋をして……。
「彼の大地の妖精族の居場所、見つけだすも時間の問題。その時も近づいております」
落ち着いた声音で淡々と告げられるマーラの報告に、苛立ちを押し殺しながら耳を傾ける。隠れている鼠を見つけることなど容易いことと高をくくって

いた。それがその鼠、ドワーフどもにこうもあしらわれようとは。ぎりぎりと奥歯を鳴らし、エバンスは足元の穴を見つめた。今にもこの穴に飛び込んで自らがドワーフどもを追いかけてやりたい衝動に駆られる。しかし、この穴一つ、たったこの穴一つを作動させるためになんとも多くの仕掛けが施されていたのだ。内部がさらに複雑であろうことは想像に難くない。ある程度のルートを見つけ出すまでは待つしかない。それがエバンスの苛立ちをさらに高めていた。

知らず肩に入っていた力を不意に抜くとエバンスはその場を離れた。そのまま玉座の間を出て正面入口と目される扉をくぐって表に出る。冷たい霧が視界いっぱいを覆い、エバンスはまた深いため息をつく羽目となった。

……どちらを見ても霧の中というわけか。待つのは苦手だ。身体を動かしているほうが性に合っている。しかし今は……。

エバンスは前庭に進み出て十分な広さの場所を見つけると、腰の剣を抜き静かに剣を振りはじめた。

待つことしかできぬというなら、せめて精神(こころ)だけでも鎮めておかねば。焦りがミスを誘う事は自明の理。我が王の行く道を害するものはできうる限り排除しておかねばならぬ。そう、それが例えわずかな小石一つであったとしても。そのためには……。

無心で剣を振り続けるエバンスの傍らにマーラがやってきたのは霧も薄まり始める頃。気の短い秋の陽が西へと傾き始めていた。

剣を振る手を止め、抜き身の剣を手にしたまま目で話すように促す。

「隠し階段が一つ、見つかりましたわ」

エバンスにマーラの静かな声が告げる。

「なに！？」

暑い夜だから？

白坂　匡

　まったく、やり切れない。
何故俺がこんな目に合わないといけないんだ……。
所属が変わって数カ月後に、いきなり遠方に長期出張と来たもんだ。まあ、会社が今はやりのウィークリーを借りてくれた。というところまでは、腹立たしいがしようがない。誰かが行かなければいけなかったのは、事実であるし。
　しっかぁしっ！
前にこの部屋に済んでいた奴が電気代を滞納したからって電気止められたのは、一体やりきれないという以外、なんだというんだ。
週末、帰宅から戻ってみれば、真っ暗！冷蔵庫の中にいれておいたものも、捨てるしかない……！
それは、まだいい……。
今は、夏なんだ！　地球温暖化でヒートアイランドな夏なんだよぉ～！　暑い！返す返すも暑い！　何はなくても暑い！　その上、冷たい飲み物も買って来たてでないと、飲めない。まだ、夏でよかったのは、風呂が沸かなくても水道でもいいことぐらいだ。しくしくしく。
　そして、不幸な偶然は重なるものと決まっている……。
　停電二日目。（止められている状態をこう言うのかは、さだかではないが……。）
何もできないので、１０時だというのにベットの上でただ、寝ころんでいる。もちろんテレビは点かないし、灯がないから本も読めない。汗だくになって寝るしかない。だから、寝てる……。でも、眠れるわけでもなく……。
と、その時。
足元で何かがガサガサうごいているような気配が、あった。これで想像するのは、誰しも「こげ茶色に光る憎い奴！」だろう。だが、灯をつけられないから確かめられないし、追い回すことも出来ない。第一、ウィークリーマンションに滞在するのに、まずゴキブリほいほいを買おうとか、殺虫剤を買おうとかそういうことを考える人はいまい。追い回して叩き潰すにも、手近に新聞とかもない……。無理に追いまわして飛び上がれでもしたら、目も当てられない。奴らの何が始末悪いって、羽のある

ことだと俺は思っている。いっそ、気がつかなかった事にして、巣に帰るのを待つ方が得策ではないのか……。
ということで、俺はなかったことにすることにしたのだが……。そのガサガサの音が一向におさまらない。前の住人は、電気の滞納だけでは飽き足らず、ゴキブリとかなんか飼ってそのまま放置していったのか……。一匹だけならともかく、集団でこられてベットの上とかに来られたらどうしよう……。俺は、しまいに寝てられなくなって、ベットの上から床を覗き込んだ。しかし、カーテンも閉めて真っ暗なので、見えるはずもない。俺は、ベットの上から手を伸ばしてカーテンを開け、床の上を見た！

居た！月明かりの中、床の上に蠢いている何かが居た。が、しかし、ゴキブリではなさそうだった。それどころか、見慣れた形の物に見える……。しかし、俺の知っているそれは、自分から動いたりしない……。断じて、しない！だが、月明かりとは言え、今日は満月。見間違っているのではなさそうだ。月の光の中、床にいるのは、一面のピーマンであった！
しかし、カーテンを開けたせいなのか、動きはとまっているようだが……。

「ピーマン！？」
「違いますよぉ！」
突然、床のピーマンの群の方から返事が聞こえた。
どうやら、ピーマンが返事をしたらしいが、ピーマンと呼ばれるのは不満ならしい……。
「あんな奴と一緒にしないで下さい。人、いたんですねぇ。昨日も一昨日も灯がついてなかったんで、人住んでないと思ったんですけどぉ。」
「電気を止められてるのは、俺のせいじゃない！！！」
また、怒りがこみ上げて来た。電気止められたせいで、なんだか変なもんに取り憑かれてしまったのた。しかも、ピーマンじゃないと主張するピーマンもどきに！
「怒らないで下さいよぉ。この辺で、ちょっと居つける空き家探してたんですけど、ここ以外見つからなかったんです。」
「で？」
「はい？」
「で、一体おまえらはなんなんだよ。」
「そうですねぇ。このお国の言い方ですと、宇宙人とか異星人とかいうものですねぇ。」
「うっ、宇宙人ン？」

「はいぃ。実は月の裏側に住んでるんですよぉ。」
「月ぃ！？月には空気なんかないぞぉ！住めるわけないじゃないか！！」
「いや、ないのは表だけで……。裏側にはちゃんとあるんです。」
「そんな非常識な星があってたまるか！」
「でも、あるんですってばぁ……。」
「で、一体地球に何しに来たんだ？　ん？　それ以前にお前らピーマンから進化した植物系宇宙人、いや、宇宙生物か？」
「違いますよぉ。ずぇんずぇん。うちらの先祖は、外宇宙から来てますからね。地球のピーマンの方が、変種なんですよ。」
「宇宙種のピーマンか！」
「ピーマンはやめてくださいってば。」
「じゃあ、なんていうんだ？」
「ピピトウって呼んでください。」
「獅子唐？　それは、お前達の種族の呼び名か？　それとも、お前一人（？）の呼び名か？」
ちなみに、暗いのでどのピーマンが喋っているのかはわかならいが。
「ピピトウです。種族の呼び名です。私の呼称は、パーミムと言います。」
――やっぱり、ピーマンじゃないか…。
と俺は思ったが、口には出さなかった……。
「で、何しに来たんだ？」
「はあ、村おこしの為に祭りをしようということになったんです。それで、人を呼べるものをということで、地球の祭りをまねようということになったんです。日本は、お祭りも多いし、調査にいいかな、とぉ。」
「で、なんの祭りをすることになったんだ？」
「お月見にしようかと……。」
「月見ぃ？　祭りってほどのものじゃないんじゃないか？」
「月に因んでいますしぃ。」
「でも、月から月見なんてできないんじゃないか？」
「あ……。」
「逆に地球見って手もあるけど、裏側じゃあねぇ。月はずぅぅぅっと同じ面を地球に向けているから、普段地球は見えないだろ？」
「じゃあ、表に出てやれば……。」
「でも、それって地球で大騒ぎになりそうだけど……。

満月だし、月見ている人沢山いると思うぞ。それに天文台とかマニアとかちゃんと望遠鏡で見ているだろうし……。まあ、これから友好関係結ぶっていうならいいんだいけどね。」

――いきなり、薄明かりの中でピーマンの緑が濃くなったような気がした……。

「だめです！　昔人間に見つかった奴がひどい目にあったという言い伝えがあるんですぅ！」

「状況をちゃんと自覚できない奴に無かったことにしたくて食われた、とか……？」

「はい……。」

「確かに、ピーマンやら獅子唐が出てきて、突然宇宙人だと言われたら、パニックになる奴が出てきても無理ないかもしれないな。」

「な、なんでですぅ？」

「だって、昔から子供の嫌いなものって言えば、ニンジンとピーマンって決まっているし……。」

「ピーマンじゃないですってばぁ！獅子唐と呼んでくださぁい！」

「大体、日本じゃ獅子唐なんて、子供は食べないぜ？」

「え……？」

「たまに辛いのがあるから、子供になんて食わせないよ。それに、大人だって辛いの嫌いな人もし……。あっ！」

「な、なんですぅ？」

「韓国とか、メキシコとかスペインとかならいいかもしれないな。」

「ああ、唐辛子がメジャーだからですか？」

「中国とかだとなんでも食われちゃうイメージがあるけど、韓国もメキシコもスペインも食欲旺盛なイメージがあるからねぇ。」

「……。」

「それに、こんな暑い部屋によくいられるなぁ。干し唐辛子になっちまうぞぉ！」

「月の裏側は空気があるって言っても薄いので、太陽光が当たっている時間は、かなり暑いんですよぉ。だから、これ位は大丈夫ですよぉ。太陽黒点が出てるときなんか、たまに干からびる奴もいますけどねぇ。」

「粉末になったりして……。」

「ま、最後には粉末になって次の世代の糧となりますから、同じことですけどね。」

「やっぱり、植物なんだ。」

「まあ、そんなもんですかね。さて、どうしたものです

かね。どんな祭りがいいんでしょう？」
「う～ん。神輿担ぐとお前たち潰れそうだしなぁ。踊るにしても、ピーマンってどうやって踊るんだぁ？」
「ピピトゥですってば！そうなんです。我々もいろいろ考えたんですが……。」
「でも、ピーマン踊りが絵になるとは言い難いなぁ。スペインにはトマト祭りって、トマトを投げ合う祭りもあるけど……。」
今度は、パプリカのように赤くなった……。
「だめです！トメィト族に敵対行動と思われてしまいますぅ！」
「なんだぁ！？月には、トマトまでいるのかぁ！？　まさか、ナスとかキャベツとか大根とかまでいるんじゃないだろうな？」
「いますよ。ナスゥ族や黄ヤベツ族とか、デェコン族も……。」
「もしかして、カボチャもいたりすると、ハロウィーンもだめだな。」
「はいぃ。」
「え？　カボチャもいるの！？　月の裏側って、八百屋かぁ？」
「……。」
否定しないところを見るときっとそうなんだろう、と俺は納得した。
「大体が、祭りっていうのは、収穫の豊穣や無病息災を祝ったり、悪いものを静めたりするのが普通だからなぁ。後は、動物ものだが動物なんか入れたりしたら、スペインの牛追い祭りのように死人、いや、死ピーマンがでそうだし。」
「ピーマンじゃありませんってば！　いっそ、あなた連れて行って人間動物園なんてのは……。」
「食うぞ！　こらあぁ！」
「す、すみません。冗談ですってば……。大体、月の裏側まで動物を運ぶのは大変ですし、檻を作らなきゃいけないとかいろいろ手におえなさそうです。」
「太陽は見えるんだろうから、太陽でも祭ってみたらどうだ！？」
「元々そういう祭りは、月ではポピュラー過ぎます。第一、太陽は神様です。」
なんか、お客様は神様ですというなんかの台詞が浮かんだ……。
「裸祭りもあんまり意味ねぇし。いっそ、出店を並べる

っていうのはどうだ？　たこ焼きとか射的とか……。あ、もしかして食べ物はだめか？」
「野菜が入ってないものでしたら……。」
「そりゃ、だめだな。でも、射的、ダーツ、輪投げ、型抜き、くじ、数字合わせ、金魚すくい、ヨーヨー釣り、お面売り、風船とか、色々あるぞ。」
「おお、それはいいですね。でも、物が大きすぎるので、そのまま持って帰るのは無理そうですが。」
「少しは苦労しろって。」
「そうですね。なんとかなりそうな気がしてきましたぁ。」
ピーマンは、明るい声で言った。
「そうだ、花火も上げたらどうだ？　盛り上がるぞ！」
――打ち上げに失敗したら、焼き野菜が出来上がるが。

次の朝目がさめたら、彼らはもういなかった。
すぐに材料の仕入に行ったのか、月に帰って準備をしているか、それとも、あまりに暑かったので俺が幻を見たのかは、不明だ。
でも、あれが本当だったとすると、なんだか愛嬌のあるあいつ等のせいで、ピーマンが食べられなくなるかもしれないから、夢だったことにしておこう。
例え、一月後の満月にどっかの天文台が月の裏側から花火のようなものが上がったように見えた、と発表しても……。
そうだ、明日焼肉屋に行こう。野菜盛も頼もう。肉だけじゃ栄養偏るし……。
今ごろ、月の裏側にはたくさんの焼き野菜が転がっているかもしれないけどね。

連載　第三回

眼鏡越しの空

しもこし

木原智美…主人公。高校二年生。
大石光輔…主人公の同級生。
倉下桃子…主人公の同級生。友達。
木原利通…主人公の、できのよい弟。

土曜日の午後、智美は学校の最寄り駅から五つほど離れたところにある総合体育館に来ていた。ここで、大石光輔のインターハイ出場をかけた、決勝リーグの試合がおこなわれるのだそうだ。智美は外にいた。体育館の裏で空を見上げ、うろうろとしている。もうすぐ試合が始まるため辺りは比較的静かだ。

(今日は、ちょっと暑いな)

眼鏡のズレをなおした。

智美は「いい角度は無いか」と体育館の屋根、周囲の建物の屋上、と視線を移す。手には昨夕弟の利通から借りたデジカメを持っている。この角度はどうか、こっちの角度はどうか、と時々ファインダーを覗いてみるが、意外と視界に限界があり、なかなか、これ、という角度がなかった。

それでも、しばらく探していると、まあまあ気に入る角度があり、撮影してみた。続けて微妙に角度、ズームを変え、撮ってみる。

(えーと、撮ったのはどうやって見るんだっけ。たしか、再生のモードにするために、このダイアルを・・・)

このデジカメは、モード選択用の小さなダイアルが付いている。これによって、撮影モードになったり、再生モードになったり、近距離撮影、強制フラッシュ撮影、などなどのモードになるらしい。しかし、智美はうまく飲み込めていない。とりあえず撮影と再生ができればいいので、困ってはいないが・・・

(ほんとに、どうしてこんなに面倒なんだか。だいたいトシも不親切だよ。どうも、機械に強い奴って、このくらい知ってるだろうって、思い込んで説明するから困るのよね・・・専門用語ばっかりで、わかりゃしない)そう思いながらも再生して、今、撮影したばかりの画像を見

てみる。(うーん、やっぱり、今一つかなぁ)
智美のポケットでケータイが振動した。倉下桃子が体育館の中から呼んでいるのだ。もともとこれは倉下のケータイである。智美が外へ行くというので、倉下が智美に渡したのだ。
「トーモ、早くおいで、始まるよ。あたし、席に戻ってるからね。なんか、席、取られちゃいそうだから」
体育館内の公衆電話のようだ。
「あ、うん。ごめん、すぐ行く」
中に戻ると、結構、応援で人が入っているのがわかった。来たばかりのときは人が少なかったし、決勝と言っても、まだ全国大会というわけでもないので、そんなに人が来るとは思っていなかった。倉下がいるのは二階の観客席だ。最前列、全体がよく見渡せる良い席だった。智美はその横の席に着く。
「何やってたの」と倉下。
「うん、写真撮ってた」
「何の」
「・・・空」
そう言うと、倉下は眉間にシワを寄せて何か言いた気な表情を見せた。その何か、とは、もちろん「何のために」であるが、彼女は口には出さなかった。
コートを挟んだ向こう側、向かって左側がうちの学校の男子バスケ部のベンチである。大石の姿も見える。大石はカメラを抱えた男子生徒としきりに話している。カメラと言ってもフィルム付きレンズ(使い捨てカメラ)やワンタッチのコンパクトカメラとは違う。一眼レフだ。倉下が言うには、三年生で、写真部の部長らしい。
大石は、その人と話しながら周囲を見回し始めた。智美の辺りで視線を止めると、手を振って見せた。
(大石君、手を振ってる。・・・この近くにカノジョでもいるのかなぁ。大石君て、どういう娘が好きなんだろう。・・・なんか、興味あるなぁ)智美たちの周囲には、やはり、同じように応援に来ている女の子たちが群がっていた。(そう言えばカノジョらしき娘って、見たことないし、聞いたことないなぁ。・・・あれ、よく考えてみれば、昨日、大石君のお母さん、「女の子連れて来るの珍しい」って言ってたような・・・。ひょっとして、今、わたしに手を振ったのかな・・・)しかし、智美はすぐにそれを否定した。(いや、いや、やめよう、そんな身勝手な想像は・・・)
試合が始まる。試合は、初めのうちどちらが圧倒する、

というわけでもなく五分五分で進んだ。相手チームも決勝まで来るチームだけあって弱いチームではない。聞いた話では、全国大会常連の学校なのだそうだ。全国大会でもベスト4に入る強豪ということだった。

この試合を見ている限りでは、この二チームのレベルは同じくらいのように見えた。しかし、カラーは異なっていた。相手チームは、選手一人一人の能力の差は少ないが、総合力が高かった。うちは違う。ゲームを組立てる大石と、フォワードの新川の二人がメインで、偏りがある。もちろん、その他のメンバーが役立たずというわけではないが。

新川と大石のコンビはよく息が合っている。しかし、二人は同学年だが、まったくタイプが違う。大石は誠実でしゃんとした性格だが、新川は軟派系だ。いつもふわふわしている。二人が部活動以外で一緒にいることはほとんどない。しかし、これが試合となると絶妙なコンビになるのだから不思議だ。大石がバスケットゴール際に放り投げるように出したパスを、新川が空中で受け取りそのままシュートする大技も見せた。アリウープというらしい。

試合が進むにつれ、多くの目が大石に集まりだした。その理由は明らかだった。大石の動きが、極端に目立つのだ。自チーム、相手チーム問わず、他のどの選手よりも動きがいい。まず、ドリブルのスピードが違う。誰よりも速い。速攻時のロングパスも速くて正確だ。ドリブルで相手選手を抜く時、相手に対し器用に背中を見せるターンをして抜いていった。1対1であれば、大石を止められる人はいなかった。パスも普通ではなかった。チームメイトを見ないノールックパスがいいところに何本も通った。チームメイトからのパスを、ほとんどノータイムで、弾くように真後ろへパスする技も見せた。それを受け取った選手がノーマークになり、得点につながった。まるで、大石には横にも後ろにも目がついているようだった。相手選手のパスを何度かスチール(横取り)するところも見せた。相手のパターンを読んでいるようだった。前半のクォーター1、2は、結局、大石のパスがよく通り、うちの十点リードで折り返した。ハーフタイムに入る。

「あの、ちょっといい」

それは、試合が始まる前、大石とベンチの所で話していた男、写真部の部長だった。髪が少しボサッとしてい

る。一眼レフカメラを首にかけている。智美と倉下に話しかけたように思われたが、よく見ると、彼は倉下にだけ話しかけているようだった。

「何でしょう」と倉下。

「木原さんだよね」

智美と倉下は顔を合わせた。倉下は智美を指差しながら答える。

「いいえ、『木原さん』は、こっち」

男はそれを聞くと、意外という表情を見せ、カメラを構えてカメラ越しに智美を眺めた。智美は、撮られるのかと思って緊張したが、そういうわけでもなかった。ふうん、と言って撮らずにカメラを降ろしてしまった。

(なんか、失礼な人だな)

「俺、田端。写真部。よろしく」

「はぁ」

田端は智美が持っているカメラに気付いた。

「それで、大石を撮るの」

「いえ、そういうわけでは。たまたま持ってただけです。それに、試合中にフラッシュというのも悪いし」

「あ、そう。・・・じゃ、何、撮るの」

智美は、変な奴、と思われそうだったので本当は答えたくなかったが、田端は大石と知り合いのようだし、とりあえず答えておくことにした。

智美は上を指差す。

「空です」

田端は一度上を見上げ・・・もちろんそこは体育館の天井であるが・・・それから智美に視線を戻した。しばらく黙って智美を見ていたが、おもむろに再びカメラを構えた。そして、なるほど、と独り言を言った。

「は」

「ね、もう一度上を指差してみて。それから今度は、上を見上げて、・・・ほんとに空を見上げるつもりで。そう、・・・自分の撮りたい空を思い描いて」

「はあ、・・・これでいいですか」

智美は、空の写真集にあった、白い三日月の浮かんでいる空を思い浮かべた。その時だ、カシャッとシャッターを切る音が二、三度聞こえた。どうやら、そんな智美を撮ったらしい。

「あのう」と智美。

「あ、月曜日に部室に来てよ。今の写真、あげる」

(いや、というより、勝手に撮らないでほしいんだけど。・・・まあ、減るもんじゃないけど)

「あたしは撮ってくれないんですか」と倉下。
田端は眉間にシワを寄せた。
「ごめん、今、綺麗な写真は撮れないから、また今度ね。・・・あ、君が悪いんじゃないよ。高感度フィルム使ってるせいで、仕上りがザラついちまうんだ」
(ちょっと、ならなんでわたしを撮ったの)
田端は智美の方に向き直る。
「あ、そうだ。・・・あのさ、そのデジカメ、あと何枚か撮れるなら、試合撮ってみてよ」
「え、でも・・・」
田端は智美からカメラを取り上げ、ダイアルを回して操作をし始めた。色々と操作したあと、それに自分が持ってた三脚を付けた。
「これと同じ奴、いとこが持っててさ。・・・フラッシュを強制オフにすれば、自動的にシャッターが遅くなるんだ。これくらいの明るさなら、綺麗に写るよ。・・・まあ、選手は少しボケるけどさ。・・・リモコンあるよね、・・・うん、そう、シャッターはそれで切って。・・・ところで、大石は、どう、格好よく見える」
(何でそんなこと訊くの)「え、はぁ、そうですね」
「大石の試合は、よく見に来るの」
「いえ、試合は初めてです」田端は、ふうん、とまた意外そうな表情を見せた。智美は補足する。「練習はたまに見に行ったりはしますけど。・・・でも、大石君て、試合ではあまりシュートしないんですね。練習では上手にシュートしてたのに。大石君て、シュートは本番に弱いんですか」
何も知らないんだな、と言いた気な表情をする。
「そんなことないよ、俺の感だけど、全国でも十本、いや、五本の指に入るくらいうまいんじゃないかな。昔はフォワードやってたし。でも、あいつはフォワードよりポイントガードの方が合ってるからね。あいつがポイントガードをやると他の選手の動きが何倍も良くなる。こんなに良いポイントガードは、そうそういないよ。・・・ああ、それから、後半、大石のシュート、増えると思うよ」
「はぁ、ところでポイントガードって、何ですか」
田端は呆れて説明するのも面倒そうだった。話によると、どうも、ゲームメイクをするポジションのようだ。パスを出すことによりチームメイトの力を引き出したり、状況によっては自らシュートしてゲームを制御したりする。コート上の監督ともいえるポジションだという。智

美は、大石がゲームメーカであるということは見ていて気付いたが、そういうポジションがあるということは知らなかった。智美は、みんながみんなボールに向かって突進し、ボールを持ったら、とにかくシュートすれば良いだけだと思っていた。しかし、どうもそういうものではないらしい。体育の授業とは随分違う。

田端は、カメラを智美の前にセットアップすると、また後で、と言って別の場所へと行ってしまった。

「うーん、何か、大変なことになっちゃったな」

智美がそう言って倉下を見ると、彼女は肩を竦めて智美を見ていた。

「ねぇ」と倉下。「大石もいいけど、相手チームの田口君もいいよね。どう思う」

「モモ、敵も応援してるの」

「・・・ていうか、かっこいい人を応援してるの。あんたは、大石がいれば他はどうでもいいんでしょうけど。あたしは違うから。・・・ね、ほら、あそこにいる彼、いいでしょう」

「・・・ふうん、あれが『ながれ・・・』」

しゃべりかけで、倉下が遮る。

「言っとくけど『ながれ山　三四郎』じゃないよ」

「う、・・・なぜそれを・・・」

「あんたの口癖でしょう。・・・て、言うか、いつも思うんだけど、誰、『ながれ山　三四郎』って」

「え、う・・・」

智美は返答に困った。そのときである。突如、応援席でフレーフレーと大声で応援するボロボロの柔道着を着た男が現れた。みんなが注目する。みんなが、誰だろう、と言い始めると、その男は、

「それが『ながれ山　三四郎』っ」

そう言い、体育館の外へと走り去ってしまった。

「あれが・・・『ながれ山　三四郎』・・・さん・・・なの・・・か・・・な」と智美。

「だから、何者。トモの『知り合い』・・・なわけ」

「・・・え、・・・う、・・・し、知らない」

ブンブンと首を横に振る。

「変なやつ。・・・ところで、トモ。昨日、大石君の自転車に乗ってたけど、何か進展でもあったの」

智美はカメラの方に視線を移した。倉下の質問にファインダーを覗きながら、半分上の空で答える。

「え、別に。・・・だいたい、進展とか何とか言う以前

に、そういう関係じゃないから。ただ、帰りがたまたま同じになったんで、一緒に帰っただけだよ」
「でも、だからって、後ろに乗せてくれたりはしないでしょう。その後何があったか、言ってごらん」
智美は、本当にたいしたことは無かったのだ、と前置きしてから、あったこと全てを話した。聞き終えると、倉下は、へぇ、と言ってしばらく、じっと黙って智美を見据えていた。
「ね、たいしたことないでしょう」
と智美が言うと、倉下はあきれ顔で言い返した。
「それって、まじボケなわけ」
その後、倉下は、おかしい点を指摘した。
突拍子もなく、家まで自転車で送る、と大石が言いだしたのはおかしい。大石の家と学校の間に智美の家があるなら別だが、智美の家の方が遠いのだ。それを知って送ったのは変である。
いくら大石の記憶力が良いと言っても、クラス中の生徒の住所を知っている筈はない。普通に考えれば、近所でもないし、そんなに話したこともない智美の家の住所を覚えてたりはしないだろう。
「うーん、そう言われてみると、そうねぇ、変な気がしないでもない、かなぁ。・・・で、ということは、えーと、それで、どういうことになるの」
倉下は、だめだこりゃ、と言いた気な表情で、単刀直入に、はっきり言おうとした。
が、そのときだった。周囲から大きな溜め息が聞こえてきた。何事かと思えば、それは試合の状況のせいだった。既に試合は再開されており、たった今、相手チームに一ゴール差まで追い付かれたところだったのだ。
その後もさらに続け様に点を取られ、逆点されてしまった。じわじわと引き離されていく。智美と倉下は話の途中だったが、それを忘れて試合に見入った。
前半、大石についていたマークは一人だったが、後半はそれが三人になっていた。どこからか「ゾーン」だとか「プレスだ」とか言っているのが聞こえてきた。どうも相手にそういう作戦をとられているようだったが、智美には意味がわからなかった。ただ、大石が苦しい立場になっているのだけは理解できた。それでペースを崩され、立て続けに点を取られてしまったようである。
大きくリードを許してしまった。しかし、大石は次第にそれにも慣れてくる。マークが三人でも、大石はなん

とかそれを擦り抜けてパスを出せるようになったのである。順応が早い。

その後、相手のディフェンスが続けてファウルを取られ、ガードが弱くなった。何となく、大石がファウルを誘ったように見えた。そういうテクニックを使ったのかもしれない。だとしたらすごい。ファウルは全部相手だ。大石自身は、一つも取られていない。

その対策のためか、相手のディフェンス形態が変わった。フルコートでそれぞれ一人一人が特定の人のマークについた。相手はさすが全国指折りのチームだけあり、大石以外は、疲れもあってかマークを振り切れなかった。パスの出し先がない。そこで大石は自分が直接シュートに行った。大石にとって、一人のマークを抜くのは簡単なことだ。チームメイトは、わざとその直前にバスケットゴール周辺から離れた。相手チームの選手がそれに誘われる形でゴールから離れる。大石が完全にフリーになった。

ドリブル。

高いジャンプ。

リング。

思い切り叩きつける。

それは、豪快なダンクシュートだった。

目が醒めるようなシュートだった。

智美は、すごさに身震いした。

大石はその後も連続でシュートを決める。フェイントをかけ、ドリブルで抜く、さらにジャンプしてからも空中でフェイントをかけ、相手ブロックを避けながらシュートした。相手チームは、誰も大石を止めることができない。

そして、相手のディフェンス形態がまた変わった。相手チーム全員がゴール下に集中した。いくら大石でも五人のディフェンスを抜くのは難しい。しかし、それならそれで、大石には別の方法があった。スリーポイント(3P)ラインのギリギリ外からシュートを放つ。それが綺麗にバスケットゴールへ吸い込まれていった。三点が追加される。その後も、高確率で続けて3Pシュートが決まった。

結局、相手チームは、後半開始直後のディフェンス形態に戻った。ただし、ファウルを恐れて最初のような厳しいディフェンスはできなかった。

後半開始直後についた点差は、もうほとんどない。しかし、相手は得点力の高いチームで、そうそう簡単には

逆点に至らなかった。シーソーゲームになっている。
大石や新川が入る前、この学校のバスケ部はあまり強くなかったと、智美は聞いたことがある。昨年から県でも上位に入るようになったが、インターハイ出場経験はまだない。
智美は、ファインダー越しに集中して選手たちを追った。何度か、遅すぎて失敗したりもしたが、いいタイミングでシャッターを切れたと思うものも結構あった。被写体は、大石に限らなかった。新川や、相手選手も含めて、いいと思うところでシャッターを押していた。
クォーター4、しかも残り時間僅かのところで、とうとう相手を二点差までに追いつめた。
智美はドキドキと心音が高くなる。
(勝てるかな)
場内全体の興奮と緊張も高くなる。
ボールは、相手チームがキープした。大石たちのコートに入って攻撃している。が、彼らはパスを繰り返し、積極的に攻めてこなかった。攻撃の制限時間が僅かになって、ようやく相手選手の一人がシュートをうつ体勢に入った。その時である。新川がその選手に近付いた。その彼はあせったらしく、味方にイージーなパスを出してしまった。それを大石がカットして自分のものとした。大石は、一瞬残り時間を確認すると、ドリブルで相手コートに入った。すぐにマークが寄ってくる。抜いてシュートする時間はもうなかった。その場でシュート体勢に入る。
(え、ちょっと、それは遠・・・)大石は構わずシュートを放つ。(い・・・)放った後、大石はシュート後の姿勢のまま固まって動かなかったが、表情には僅かながら変化が見られた。智美はそれを見逃さなかった。(よ・・・、え、笑った・・・)智美は、大石が微笑を浮かべているのに気付いた。
ボールは、何かに導かれるようにバスケットゴールへ吸い込まれていった。智美は、反射的にシャッターを押し、その瞬間を収めていた。得点は3点。逆点した。ボールが床に落ちると同時に、終了の笛が鳴る。
大石はガッツポーズをとった。
(あ、勝ったんだ。すごい)
周囲から歓声が上がる。倉下は手をたたいて喜んでいる。周辺にいる女の子たちも手をたたいている。中には涙を流している女子もいる。

(そんなに感動する娘も、中にはいるんだぁ)
選手たちも喜んでいる。
大石はみんなから頭をたたかれていた。
本当に嬉しそうだ。
智美、といえば、
(やっぱり、大石はかっこいいんだ)
そんなことを考えながら、ただ、ぼんやりと大石を眺めていた。何故か素直に喜べなかった。たしかに、大石は笑った。普通に考えれば、まぐれ狙いの距離だ。しかし、大石はまぐれを狙ったわけじゃない。自信があったのだ。そして、ボールが手から離れたときには、既に入ることがわかっていたのだ。
(だとすれば、・・・すごすぎる、よ)

「あ、そうだ。モモ、さっき何て言おうとしたの」
試合後。辺りの興奮も収まりつつあった。この後は表彰であるが、体育館を出る人達もボチボチと増えている。大石はベンチの所で片付けをしながらチームメイトと話をしていた。
「『さっき』って、なんだっけ」
「わたしに『まじボケ』って言ったじゃない」
倉下は、それで思い出したようだ。
「あーあ、それね」倉下は続きをしゃべりかけたが、ふ、と気付いたように開きかけた口を閉じた。そして、右手の人差し指で軽くあごをたたき始めた。これは、倉下の考えごとをするときの癖である。「あたしが言うより、『確実』がいいかなぁ」
「え、・・・それ、どういうこと」
そのとき、背後から男の声が聞こえてきた。
「木原さん、話中悪い。それ、いいかな」
田端だ。三脚を指差している。
「あ、はい、今」
智美はデジカメから三脚を取る作業を始める。
「で」と倉下。「トモは大石君のこと、好きなんだよね。・・・それはいいとして」
智美はビクッとして手が一瞬止まる。あせる。
「ちょっと、そんな断定的な・・・」
「大石君と付き合ってみたい、とは思ってるの」
「え、それは・・・、うーん、そう言われると、うーん、そうだね。・・・大石君、かっこいいし、そうなったらいいな、と思わなくはない、・・・けど」
確かに、言いながら「それは正しいな」と思った。そ

う、智美は確かにそうなったらいいとは思っていた。しかし、心のどこかで、それを否定する自分もいた。その「自分」は、とても小さく、智美自身、気付かないくらいの大きさだった。それは、ただ、ちょっと説明のつかない「違和感」として感じられているだけだった。

「『けど』何かあるの」

それには、答えようがなかった。

「ううん、別に、何もない」

智美は三脚の脚を畳んで小さくすると、田端の方に向き直った。背後から「そう」と言う倉下の声が聞こえる。

「三脚、ありがとうございました。いいのが撮れたと思います」もちろん、「わたしにしては」という前置は必要だが。

「そう、よかったら、それ、月曜にでも見せてよ」

それに対して智美が「はい」と返事をしようとしたときだった。

突如として背後から大きな声が聞こえてきた。その声の主は倉下だ。驚いて智美も田端も倉下の方を向いた。倉下の方を向いたのは、智美たち二人だけではなかった。試合後も残っていた観客たち、片付け中の相手チーム選手、そして、もちろん、大石を含めた、うちの選手たちも。ようは、体育館にいる全員が倉下の方を向いたのだった。そして、その中で、一番驚いたのは大石だろう。なぜなら、

「おおいしーっ」

と、それは、大石を呼ぶ声だったのだ。

「なにーっ」と大石。

倉下は手を振って見せてから、あとを続けた。

「トモがねーっ」

(え、おい)

智美はギクッとした。何か嫌な予感がする。

「おおいしのことーっ」

(おーい、ちょっとまて)

「好きだってーっ」

(なにーっ)

一瞬、智美は自分の耳を疑った。しかし、すぐにそれが聞き違いではないことを理解し、慌てて倉下に向かって文句を言おうとした。・・・が、

「ちょ、ちょ、ちょ、ななな」

・・・言葉にならない。

大石の方を見てみると、彼は口をポカンと開けて、あっけにとられていた。智美は大石に向かって何か言おう

としたが、言葉にならない。なかなかいい言葉も見付けられなかった。そうこうしているうちに、大石は正気に戻った。彼は智美と倉下に向かって、ニコニコしながら手を振りだし、そして、こう言った。

「『ぼくも』って、言っといて」

(なっにーっ)

今度は、智美があっけにとられた。固まって動けない。

倉下といえば、ニコニコしながら

「・・・ってさ。トモ聞こえたよね」

と言っている。

智美は反応できなかった。

田端はというと、いい表情、などと言って、そんな智美と大石を交互に写していた。

大石といえば、まだ手を振っている。

場内は、といえば、歓声が上っている。

そして、智美といえば、やっぱり、まだ固まっていた。

<つづく>

編集後記

今年は例年になく雪が多いと聞いてついにスタッドレス投入に踏み切りました。おかげで財布の中までカラッ風が吹いております。サブッ(+_+)

しかしまあ何といっても雪とくればスキー。5年ぶりに滑ってきましたが、結構体が覚えているもので何とか転ばずにはすみましたが、寄る年波にはかなわず……あぁぁカラダのふしぶしがぁ！すっかりロボットと化したのでありましたT_[oo]_Tカキン

雪の箱根駅伝もすごかったけど、初めて見ましたよ、カラーボール使ったサッカーの公式戦。雪の白に赤い色が映えて…やってるほうは大変なんでしょうけどね。

（翼）

ＰＤＦ版になって早3号目。昔のコピー取りはなつかしくはあるけど、原稿もネットで送れるし、本もネットに載せられる。便利な世の中になったもんだ。

（「年取って肉体労働したくなくなったんだろ！」）

会社で上から数えたほうが早くなったのは、いつの頃からだろう。（「とっくにお局なくせして！」）

来年は、勤続〇〇年とかでリフレッシュ休暇とか言うのがもらえるらしい。最近、体調もいまひとつだし、どこか外国などで命の洗濯してみたいものだが……。

（「遊びたいだけだろ！」）

行けるのかなぁ……。後輩を育てねば……。

（「行きたきゃ、頑張るしかないだろっ！」）

（紅）

年末年始を、久しぶりに家族のみで過ごしましたが、これはこれで大変ですな、やっぱ。実家に帰るとすげえ経費がかかるからと思って帰省を止めたのに、クリスマスだお正月だと次から次へと物入りで、挙句におせちや雑煮の心配までせにゃならんとは…ケーキは手作りしたけれど、おせちってあまり食べないんですよね、皆。とりあえず雑煮の出汁とりとぶりの下ごしらえでもう年が明けてしまったという感じです。とほほ。

ちなみに猫は福岡出身なので、おすまし仕立てにぶりやら鶏やら青菜やら、具沢山で食べ甲斐があります。ちょっとはぶいちゃったけどね。だっはっは

（猫）

EOF